

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The application of thesauri to linguistic research

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮島, 達夫, 小沼, 悦, MIYAZIMA, Tatu, ONUMA, Etu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001124

言語研究におけるシソーラスの利用

宮島達夫・小沼悦

MIYAZIMA Tatuō, ONUMA Etsu: The Application of Thesauri to Linguistic Research

要旨：言語情報処理研究の分野ではシソーラスが活用されているが、それらは特定科学分野の概念間の関係を取りあげることが多い。一般用語のシソーラスは表現辞典の一種として利用されるのが大部分であるが、これも言語研究に役立つ面がある。

この報告は、国立国語研究所の『分類語彙表』（国立国語研究所資料集 6, 1964 林大担当）を言語研究に利用した実例をあつめて、目録をつくり、解説をつけたものである。論文の総数は 119 にのぼる。このなかには、たんに一定分野の類義語群をさがすためにつかったものや、ある観点から作成した語彙表に番号をつけただけのものもあるが、この分類体系を適用した研究もおおい。その分野も、日本語の語彙体系全体をあつかったものから、特定の言語作品の用語の特徴をとりだすための文体論的研究、さらに文法・方言・言語史・言語教育・言語情報処理など、ひろい方面にわたっている。

キーワード：シソーラス 〔分類語彙表〕 意味分野 類義語 言語研究 日本語

Abstract: Thesauri are often used in linguistic data processing, dealing mainly with the relationship of concepts of a specific field in science. Most thesauri of general terms are utilized as handbooks to find suitable expressions, but they also deserve to have their own role in linguistic study.

We collected examples of linguistic studies utilizing The National Language Research Institute's "Bunrui Goihyō" ("Word List by Semantic Principles" NLRI Source 6, 1964, O. Hayashi [ed.]) and compiled an annotated bibliography of 119 papers. While some use it just to find synonymous words in a specific semantic field and others merely to provide classifying numbers for items of their word lists, many researchers utilize its classificatory system in their study of Japanese. The object of its application ranges from the lexical system as a whole to stylistic characteristics of literary works and there are similar studies in many other fields, such as linguistic history, dialectology, linguistic education and linguistic data processing.

Key words: thesaurus, "Bunrui Goihyō"(Word List by Semantic Principles), semantic field, synonym, linguistic study, Japanese language

(目次)

1. まえがき
2. 語彙体系
3. 作品の用語調査
4. 文法
5. 方言
6. 日本語史
7. 教育・発達
8. 言語情報処理
9. 類語群
10. 意味分類

1. まえがき

シソーラスは、一般には類義語をさがすための表現辞典としてつかわれることがおおい。しかし、言語情報処理の面では、これとちがった意味でシソーラスの重要性がみとめられている。ここでは、日本語の研究のなかで、シソーラスがどのように利用されているかを概観し、今後の研究の参考にしたい。なお、ここでは、「研究」ということばを、ややひろくとして、教育における基本語彙設定などもふくむことにする。

日本語のシソーラスにも、いくつかの種類があるが、われわれは、調査対象を『分類語彙表』(国立国語研究所資料集 6, 1964年3月刊, 林大担当)に限定した。これは日本語のシソーラスとして代表的なものであり、国立国語研究所の刊行物のなかでは、抜群に発行部数がおおい。その理由は、やはり表現辞典としての一般の利用にあるとおもわれるが、同時に、言語研究の面での利用度もたかい。『分類語彙表』を対象とすることで、日本語研究におけるシソーラス利用の大部分をカバーできるものとおもわれる。

『分類語彙表』以外にも、言語研究に利用されたシソーラスはある。日本語のどのような分野にどのような単語があるかを記述するために意味分野を

設定したもの、と考えれば、和名抄や節用集など、意味分類体の辞典の編集作業は、すべてシソーラスの作成であるとともに、これを利用した言語研究という範囲にはいる。近代にはいつてからの業績で、いちばんふるいものは、おそらく、ロジェのシソーラスを紹介し、その体系にしたがって国語教科書の語彙を分類した

垣内 松三『基本語彙学 上』〈1938〉

である。ロジェは英語についての分類だから、対照研究などには利用されてもよさそうなものだが、なにしろ、あの論理主義的分類は、システムを問題にせず、類義語集としてつかうのならともかく、語彙体系のモデルとしては、とても利用しようという気をおこさせないだろう。垣内氏の利用法にちかいものに、独自の分類をほどこした

田中 久直『国語科学習基本語彙・指導の実際』〈1956〉

があり、もっとかんたんな分類では、

土居 光知『基礎日本語』〈1943〉

がある。方言については、

東条 操『標準語引分類方言辞典』〈1954〉

が意味分類体の形式をとっており、これによって方言量を調査した

真田 信治「基本語彙・基礎語彙」(岩波講座日本語 9『語彙と意味』,1977)のような研究もある。

大野 晋・浜西 正人『角川類語新辞典』〈1981〉 [= 『類語国語辞典』] は、語数もおおく、意味の説明があるなど、類義語集としては、むしろ便利な点があるが、言語分析の道具としては、一般につかわれない。『分類語彙表』の使用がこの方面で先行し、国立国語研究所の権威がきいている、ということも、あるかもしれないが、内容的にも、動詞や形容詞を名詞とおなじ項目にいれていることが、ひびいているのではないかとおもわれる。『分類語彙表』の大分類(体・用・相・その他)が、一種の品詞分類としてつかわれることがおおいことからみて、これがない分類は、言語研究には不便なのである。

以上は一般語のシソーラスであるが、一方、言語研究につかわれる用語そ

れ自体のシソーラスとして、

国語学会編『国語学辞典』〈1955〉

にのせられた「項目一覧表」がある。これも、すくなくとも間接的な形では、日本語研究におおいに役だってきたにちがいないが、利用を明記した研究文献があるかどうかは、あきらかでない。

『分類語彙表』は国立国語研究所の語彙調査とともに成長してきた。

国立国語研究所報告 4『婦人雑誌の用語』〈1953〉

には、「5・1 分類語彙表」という節があって、4280語ほどが分類されている。ここでは、まだ体用相などの用語はでていないが、これらに対応する4分類や名詞のなかの5分類は、すでに確立している。ただし、動詞や形容詞のなかを3つに大別するところみは、まだされていない。また、I. 1, I. 2などの番号はあるが、それ以上のこまかい分類番号はついておらず、分類項目に対する名づけもない。

国立国語研究所報告 13『総合雑誌の用語(後編)』〈1958〉

では、「4 意味から見た語彙の構造」という章のなかに「分類語彙表」がある。ここにあげられた語数は明記してない。この段階で、約1万6千語の分類ができていたようだが、ここにのせたのは、その一部のようなのである。ここでは、<1.100 コソアド><1.101 物事・項>などの分類番号および項目の名称がついており、動詞や形容詞も3つに大別されて、現在の『分類語彙表』の骨組みができあがっている。

このように、単行本としての『分類語彙表』刊行以前に、その分類体系ができていたので、それを利用した研究もある。

宮島 達夫「方言の語イ体系」(『国語学』36, 1959)

は、方言の意味記述に、

阪倉 篤義「万葉語彙の構造——(その一)名詞について——」(『万葉』34, 1960)

は万葉と古今の語彙的比較に応用した例である。阪倉氏の論文は、以後の古典作品の分析の手本になり、この方法にならった研究がおおい。

国立国語研究所報告 21『現代雑誌九十種の用語用字 総記および語彙表』〈1962〉

は、度数7以上の上位7000語の語彙表をのせているが、これらには、すべて分類番号がつけられている。『分類語彙表』と同時に刊行された

国立国語研究所報告 25『現代雑誌九十種の用語用字 分析』〈1964〉には、語種・品詞別の統計表がのっているが、この〈品詞〉は、ふつうの文法論でとっている分類ではなく、『分類語彙表』の4大別である。以後、これがモデルになって、〈品詞〉の統計に『分類語彙表』の分類を利用することが一般化した。

以下、分野ごとにみていくことにする。

2. 語彙体系

まず、『分類語彙表』自体を資料として、日本語の語彙体系をあきらかにしようとする研究がある。

(43) 中野 洋「『分類語彙表』の語数」〈1981〉

は、『分類語彙表』の各分類の語数をしらべたものである。

体：26487語 用：4801語 相：4613語 その他：362語

名詞の下位分類では、〈人間活動—精神および行為—〉14029と〈抽象的關係〉11071がおおく、他は〈自然物および自然現象〉4763、〈生産物および用具〉3217、〈人間活動の主体〉3183、とほぼ同じだった。意味の細分類では、〈.30 心〉〈.15 作用〉がおおかった。

(23) 玉村 文郎「語彙論から見た形容詞」〈1975〉

によれば、相の類には形容詞(590語)の約2.1倍(1241語)の形容動詞がのっているが、使用度数のたかい形容動詞はおおくない。形容動詞総数の約8割が外来要素で、形容詞のすくさを補完するものとして機能している。

(26) 玉村 文郎「現代形容語彙の構造——「分類語彙表」の「相の類」の分析」〈1976〉

も相の類の語種・語数を分析している。形容詞・形容動詞は〈3.330 風

俗> <3.368 ていねい・親切(対人態度)>の分野におおく、<3.15 - 3.17 抽象的關係>にはすくない。分布のあつい意味分野では、和語のうえに外来成分が累加されるが<3.5 自然現象>では形容動詞・外来成分の分布がうすい。なお、「形容語(彙)」という表現は、形容詞と形容動詞とをあわせた総称として、この論文で造語されたもので、この名称は

(70) 玉村 文郎「形容語の世界」<1985>

にも、うけつがれている。形容語のうち、どの分野に外来要素がおおいか、というという統計は、

(117) 玉村 文郎「日本語における外来要素と外来語」<1991>

にもでている。

(51) 玉村 文郎「語彙および語の構造」<1982>

によれば、和語は魚名と雨の呼び方におおい。形容詞の分布は<3.3 精神および行為>に、音象徴語は<3.15 変化・動き><3.503 音>に集中する。中国語との対照でも、日本語は音象徴語率と擬態語率の高さが特徴である。

(100) 吉田 則夫「身体語彙の記述 —— 語彙記述の方法論として ——」<1988>

は、1. 人の身体部位名称、 2. 動物特有の身体部位名称、 3. 二次的
部位名称、 4. 身体部位の形状語、 5. 身体部位の名称の転義用法など
について考察したものである。病名語彙と相撲用語は、身体語を含む語の割
り合いがたかい。

『分類語彙表』は全分野の語彙を網羅しているので、外国語との対照研究
で、分野による語彙量の差から、日本語の特徴をあきらかにするのにつかわ
れることがある。

(42) 村木 新次郎「日本語とドイツ語の「基本語彙」をくらべる」<1981>

はその例で、<人間活動の主体><生産物・用具>の分野では、ドイツ語がお
おく、とくに具体名詞が目立つ。<抽象的關係><自然・自然現象>では、日
本語は名詞と動詞、ドイツ語は形容詞におおい。<人間活動・精神>では、日
本語は名詞に、ドイツ語は動詞におおい、という特徴が見られた。

(82) 玉村 文郎「語形と語義の体系性——日本語とフランス語の動詞
転成合成名詞の対照——」〈1986〉

は、日仏の比較にあたって、転成名詞のもとになった動詞がどの意味分野に属するかをしらべ、日本語では〈2.15 作用・変化〉、フランス語では〈2.12 存在・消滅〉の項におおいのが特徴であることをしめした。このちがいは、日本語の転成名詞が動作や人・産物など、ひろくさすのに対し、フランス語のそれが、もっぱら機具・装置の名であることに関係しているという。

(114) 小矢野 哲夫「シャッポはいずこへ」〈1990〉

も、とくに分析はしていないが、フランス語からの外来語を意味分野ごとに一覧表にしている。

(38) 玉村 文郎「日本語と中国語における音象徴語」〈1979〉

によれば、音象徴語率では日本語の方がたかく、中国語は大半が擬音語であるのに対し、日本語は擬態語がおおいという。形態の分布では、日本語の方がはるかに種類がおおい。

(79) 前田 均「日中基本語彙比較」〈1986〉

の日本側資料は、『分類語彙表』にもとづいた日本語教育のための基本語二千である。日本語におおいとされる魚・気象に関する語はそれほどでもない、という。中国語で使用頻度のたかい〈政治・法律・経済〉の分類項目が日本語にはない。〈軍事〉も同様に中国語がおおい。中国語は親族名称が豊富である。

(90) 宮地 敦子「身体語研究の視界」〈1987〉

は、英語との比較をするのに、土居光知氏の基礎日本語とならんで、前記の日本語教育のための基本語をつかっている。日本語の身体語では、「カタ」「コシ」などが特徴的である。

(78) 国立国語研究所『日独仏西基本語彙対照表』〈1986〉

は、4言語の学習基本語彙を分類番号順に対照してならべたものである。

(56) 林 四郎「基本語彙——その構造観」〈1982〉

は、基本語彙の大分類として、実語・虚語・虚実語を立て、『分類語彙表』の

項目にしたがいながら概観した。

なお、具体的な記述ではないが、語彙体系の研究にとって『分類語彙表』のもつ意味についてふれたものに、

(2) 佐藤 茂「語彙分類の基本的問題」〈1965〉

(74) 安部 清哉「国語語彙論の方法について」〈1985〉

などがある。

3. 作品の用語調査

ある作品やジャンルの用語調査、とくに品詞別・意味分野別の度数調査から作品などの特徴をさぐるために『分類語彙表』をつかった研究は、かなりおおい。

古典作品について目立つのは、万葉集などについての浅見徹氏のものである。

(13) 浅見 徹「古代の語彙」〈1971〉

は、このときまでになされた、阪倉・伊牟田氏らによる古典への意味分類研究を紹介するとともに、みずからも後撰集・土左日記・竹取物語の3つについて、調査をこころみ、くわしい表をのせている。土左日記は抽象的關係、後撰集は自然に関する語彙が豊富であるという。

(18) 浅見 徹「四季分類と語彙——万葉の巻ごとの特異語に関して——」〈1974〉

には、万葉の巻ごとの特異語が、意味分野にわけられている。巻10と巻12、巻8と巻10は〈体の類〉での意味構造が酷似している。地名・人名は巻14、巻16におおい。

(22) 浅見 徹「巻八巻十の語彙——語彙論的な試み——」〈1974〉

は、ある季節に使用例が集中する語が、分野別にその季節とどうかかわっているかを調べている。たとえば、〈1.52〉の天体・地形などの語は、七夕伝説と関連して秋の部におおい。動植物の項や〈1.1 抽象的關係〉の語も、季節感がこい。〈用の類〉は、季節感とは密着していないが、結びつく体の類の關係

で、季節によって表現が類型化される。

(25) 浅見 徹「巻十六の特異性——語彙構造の上から——」〈1975〉
巻16は、〈1.200 人名〉、〈1.45 道具〉、〈1.55 植物〉、〈1.56 動物〉、〈1.57 身体〉の項に特異語が集中する。

(35) 浅見 徹「万葉集の語彙構造」〈1978〉
は、巻ごとの特徴をしらべたものである。相聞歌のおおい巻4・11・12には〈1.3 感情・意志〉、巻8・10には〈1.5 自然物〉と〈1.1 時間・位置〉の語がおおい。巻16は異質語が目立つ。地名は巻3・7・14に、生産物・用具は巻16に、水辺に関連する語は巻7におおい、ということがわかった。

(53) 浅見 徹「人麻呂の用語——献呈頌歌を材料に、語彙論的に」
〈1982〉
では、柿本人麻呂など5人の歌人について、統計をとっている。人麻呂は名詞の使用がすくない。赤人も同様の傾向があるが、〈1.5 自然〉だけはおおい。

(71) 浅見 徹「四季分類・ふたつの間」〈1985〉
は、新撰万葉集と古今集との、四季の部につかわれた語彙を意味分類している。四季を通じて、分類された各項目の使用率には、おおきな変化がない。つまり、四季分類された和歌には、このんでよまれた題材が固定化していたとみられる。

(87) 浅見 徹「八代集における季節」〈1986〉
〈1.55 植物〉でみると、高使用率語は前期四集から後期四集につれて、使用度が順次低下していることから、後期作品では、秋の季節感の代表的な語（「紅葉・女郎女・菊」など）が歌の題材としてもつ比重が低い、という特色がある。

以下、とりあげられた作品の年代順に紹介していくことにする。

(84) 加藤 敏男「万葉集の直喩表現——語彙の面からの考察——」
〈1986〉
たとえる語でおおいのは、〈自然物および自然現象〉、たとえられる語でおおいのは〈人間活動の主体〉である。

(103) 寺島 利尚「旅人歌の語彙・語法をめぐって——『遊於松浦河歌』
とのかかわりについて——」〈1989〉

旅人歌と憶良歌とで類義語を分類し、対照した。憶良歌では生活用語を多用、
旅人歌では同じ語をくりかえし使用している。

(41) 宮島 達夫「万葉と古今の用語の比較」〈1980〉

万葉と古今の特徴語彙を分野別に整理している。万葉では人・海関係に、古
今では時・動植物に特徴語彙がみられる。個別的にも、「ゆふべ、いにしへ」
が万葉に、「ゆふぐれ、むかし」が古今におおい、といった違いがある。

(9) 伊牟田 経久「源氏物語名詞語彙の構造」〈1969〉

<階級・職業> <心・情> <知・意> <言語・文書> <人生・生活> に
属する名詞が豊富で、人間とその活動に関する分野(1.2, 1.3の項)がきわ
だっている。

(11) 伊牟田 経久「枕草子の名詞語彙の構造」〈1970〉

全体として<1.4 生産物・用具><1.5 自然>におおく、<1.2 人間活
動の主体><1.3 人間活動>にすくない。意義項別では<1.23 家族><
1.31 心・情><1.32 知・意>の語がすくなく、<1.42 衣類・食物><
1.44 道具>の語がおおい。

(88) 東辻 保和「栄花物語語彙の一特性」〈1986〉

仏教語彙を除いた一般語彙について、<体の類><相の類><その他>に該
当する語に概念分類を施すのに利用。

(119) 田島 毓堂「栄花物語の語彙研究序説——和歌の語彙について
——」〈1991〉

栄花物語の和歌では、万葉・古今・後選にくらべ、<1.2 人間活動の主体>
がおおく、<1.3 人間活動>がすくない。

(36) 市井 外喜子「『竹むきが記』歌意索引篇による語彙の分析—二—」
〈1979〉

歌〔家門〕に比べ、歌〔孤独〕は、使用頻度の低い語句を多用している。特
に歌〔家門〕にはない<1.4 生産物・用具>の類の使用があり、歌〔孤独〕

を性格づける語彙群といえる。

(64) 山内 洋一郎「連歌語彙の意味分類」〈1984〉

『色葉字類抄』『連珠合璧集』の分類を考察し、現代語の分類体系を適用する際の問題点を指摘。「煙」は霧の類ではなく、鉾物の類に、「露」「霧」は、雨とちがって、水の類にある、など。

(95) 山内 洋一郎「連歌語彙の意味構造の図式化——体の類について——」〈1987〉

語彙は〈自然物・自然現象〉と〈抽象関係〉の〈時間・位置〉に集中。『分類語彙表』の番号を付した「連歌語彙(体の類)意味分野図」をのせている。

(31) 柏谷 嘉弘「天草本平家物語の漢語」〈1977〉

は、(27) についての解説という意味をもち、くわしい分析はないが、大項目単位の集計表がある。名詞が大部分だが、徒然草にくらべると、その比率はややひくくなる。

(10) 小島 幸枝「キリシタンの基礎語彙——一つのモデル——」〈1969〉

品詞別では、口語体であるため、接続詞・感動詞がおおく、〈その他〉の比重がたかい。基礎語のなかでは〈1.2 人間活動の主体〉と〈1.3 人間の精神および行為〉の割合が大きい。

(69) 湯浅 茂雄「『工学字彙』の訳語とその造語要素の性格——明治期の学術用語の造語法(1)——」〈1985〉

〈生産物および用具〉と〈抽象的關係〉におおく、次に〈人間活動—精神・行為—〉と〈自然物および自然現象〉もおおい。字音語2字では〈抽象的關係〉、3字では〈生産物および用具〉にかたよりがみられ、和語は〈生産物および用具〉に集中、音訳語は〈抽象的關係〉〈生産物および用具〉〈自然物および自然現象〉に限られ、混種語は〈生産物および用具〉に集中する、という特徴がある。

(99) 能願 幸子「与謝野晶子短歌の語彙論的考察——『みだれ髪』から『火の鳥』へ——」〈1988〉

『火の鳥』は『みだれ髪』に比べて、＜体の類＞がすくなく、＜用・相の類＞がおおい。意味分野別では具体的事柄がすくなく、抽象的事柄がおおい。自然物関係は両作品ともにおおい。

(50) 佐々木 靖章「白樺派文学の語彙」〈1982〉

『分類語彙表』不載語の比率を語種別・品詞別に比較。白樺派の『網走まで』に対して、耽美派の『刺青』は不載語がおおい。『刺青』の不載語は『網走まで』より語種では漢語、品詞では名詞におおい。白樺派の『生まれ来る子の為に』の不載語は『網走まで』よりもさらに低くなり、現代語とかなり共通する部分がおおいと推測される。

(40) 宮島 達夫「意味分野と語種」〈1980〉

雑誌九十種の資料(1956)で、和語は<1.5 自然物および自然現象>、漢語は<1.3 人間活動>、外来語は<1.4 生産物および用具>に、それぞれおかった。こまかい分類でも、和語は<1.10 こそあど> <1.56 動物>などにおおい、というような特徴がある。

(39) 野村 雅昭・柳瀬 智子「児童読物の語彙構造」〈1979〉

児童読物は＜体の類＞の比率が低く、＜用・相の類＞が高いことから、比較的文章が短く、用言述語がおおいことがわかった。＜用の類＞の語は基本的な語彙に集中している。学年別では、＜体の類＞は高学年ほど増加、逆に＜用の類＞は減少の傾向にある。

(67) 井上 一郎「物語文の語彙——学習基本語彙の基礎的研究——」
〈1985〉

小学校国語教科書の物語文で、品詞構成比は、＜体の類＞が低く、＜用・相の類＞が高い。異なり語に対して延べ語は、＜体の類＞が増加し、＜用の類＞が減少する傾向にある。基幹語彙には同一の意味分野がおおく、精神活動を表わす語がすくない。

(62) 井上 一郎・児童言語ゼミナール「作文の語彙」〈1984〉

(65) 井上 一郎・児童言語ゼミナール「作文の語彙2」〈1984〉

は、同様の分析を作文についてこころみたものである。

(58) 中野 洋「流行歌の語彙」〈1982〉

流行歌の使用度数上位 100 語を新聞・雑誌の調査結果と比較して、その特徴を明らかにするために利用。上位 100 語の範囲では、〈自然物および自然現象〉をあらわす語は流行歌だけにあり、〈人間活動－精神および行為－〉は流行歌に比較のおおきく、〈人間活動の主体〉は新聞・流行歌におおきくわかつた。

(89) 稲垣 滋子「東京方言における話しことばの語彙分類」〈1986〉

話しことばでは、『分類語彙表』に比べて〈体の類〉がすくなく、〈用・相〉、特に〈その他の類〉の割合がおおきい。話しことばは書きことばに比べて〈精神および行為〉の語の割合がすくなく、〈抽象的關係〉がおおきい。意味分野別では量を表す語がおおきい。

特定ジャンルの資料をあつかいながら、意味分野の語彙量を直接の分析対象とするのでない利用法として、つぎのようなものがある。

(108) 中野 洋「高校教科書の同音語」〈1989〉

品詞が異なれば同音語としないことにすると、用の類での比率は 63.8% から 12.8% へと激減する。また、意味の大分類が異なれば同音語としないことにすると、体の類の〈人間活動の主体〉では、40.3% から 18.9% にへる。こうして、同音語の判別に品詞や意味情報が役立つことがわかつた。

(116) 宮島 達夫・高木 翠「雑誌九十種資料の和語表記」〈1991〉

は、かな表記率と品詞との関係をみるために利用。かな表記率は、〈1. 体の類〉 >0.332 、〈2. 用の類〉 >0.598 、〈3. 相の類〉 >0.684 、〈4. その他〉 >0.901 、である。

4. 文法

文法関係で、まずあげるべきものは、結合価の研究である。

(12) 中野 洋「言語情報処理における意味の把握についての一方策」
〈1970〉

は、品詞や意味に差のある語では、これと結合する語の集合にも差があるこ

とを、『分類語彙表』を利用してしめた。

石綿敏雄氏の一連の研究は、動詞が名詞とむすびついて一定の文型にはいる際に、これらの単語のあいだにみられる特定の意味的關係をしらべたものである。

(14) 石綿 敏雄「助詞「に」を含む動詞句の構造」〈1972〉

抽象的關係(2.1)の動詞と結びつく名詞は、語類が定めにくい。移動動詞(2.15～)は、場所や方向を示す名詞と結びつく。具体的な行動ではない動詞と結びつく名詞には、特定の制限のある例がおおい。たとえば、数を示す名詞(1.19)＋「しぼる」など。人間の行為を示す動詞と結びつく名詞には、人間、その組織集団を意味する語類がおおいなど。

(17) 石綿 敏雄「人間の精神活動を意味する動詞の用法」〈1973〉

(19) 石綿 敏雄「動詞を中心とした語彙の分類」〈1974〉

(24) 石綿 敏雄「日本語の生成語彙論的記述と言語処理への応用」
〈1975〉

などが、この系列に属する。

(1) 石綿 敏雄「並立助詞「や」「と」の機能」〈1965〉

では、並立助詞「や」「と」で結ばれる語は、語類として同じものであることがおおいことをのべる。

(16) 石綿 敏雄「Méthode pour résoudre l'ambiguïté dans le traitement automatique du langage naturel」〈1972〉

も、おなじ趣旨のものである。

(15) 今西 浩子「文中における分類語彙の相関——語彙体系化への一アプローチ——」〈1972〉

は、ある語と、文中でその直前・直後にくる語が、分類項目のうえで、どのような相関性をもっているかを調査したものである。

(66) 蔦原 伊都子「語の多義性について——動詞「かける」の意味分析——」〈1984〉

は、「かける」の結合する相手の名詞の意味を分析したものであり、名詞の意

味の分類にあたって、『分類語彙表』を参考にしている。

(75) 大谷 伊都子「古典における動詞「かく」の用法——抽象事を表す語との結びつきから——」〈1985〉

(85) 大谷 伊都子「多義動詞の一考察——「だす」「あげる」「たてる」を例として——」〈1986〉

は、多義動詞と、「抽象事」を表わす名詞の意味がどのように作用しあって結びついているかを分野別に整理・考察したものである。「かく」のばあい、歴史的にみて、具体物から言語や精神に関する抽象事へ、さらに精神的判断や動作など直接行動に関する抽象事へ、と結びつく名詞の範囲を広げていく傾向があるという。

結合の相手の意味的分野、という点では、文中の結合ではなくて、合成語における要素の結合にもいえることである。この方面で『分類語彙表』を利用した研究も、いくつかみられる。

(3) 廣濱 文雄「複合してサ変動詞を作る漢字語の意味分類(2)」(1965)は、「する」をはずした漢語を分類したもので、〈1.15 人間活動〉〈1.3 人間活動(精神および行為)〉の語がおおい。

(80) 石井 正彦「複合名詞の語構造分析についての一考察——学術用語を例に——」〈1986〉

和語他動詞性語基に対して《対象》という意味関係に立つ語構成要素は〈自然物・動植物〉におおく、以下、《対象》《結果対象》は〈物品・食品〉に、《手段》は〈道具・薬品・力〉に、《主体》は〈人間・機械〉に、《様態》は〈数量・動き・状態〉に、《時》は〈時間〉に、それぞれおおいという傾向がみられた。

(101) 犬飼 隆「平安末期複合動詞の意味構造——『分類語彙表』を利用する方法の試み——」〈1988〉

複合動詞のタイプは、〈1 抽象的關係〉〈3 人間活動〉〈5 自然現象〉の要素において、〈1-1〉、〈3-1〉、〈3-3〉、〈5-1〉、〈5-5〉の結びつきが原則となる。同類の結合がおおく、〈1-3〉タイプはすくない。複合力は〈1の

類>が大きい。

(21) 東辻 保和「接尾辞「がる」「ぶ・む」の対立——その意義論的考察——」〈1974〉

「がる」動詞の語基は、<生産物および用具>には認められず、<人間活動の主体>と<人間活動-精神および行為->とにある。「ぶ・む」動詞の語基は、<抽象的關係> <自然物および自然現象>におけるものがおおかった。

(61) 相原 林司「形容詞分類の一試案——派生語形成の可否による——」〈1983〉

体言性の派生形(「-み」「-さ」「-げ」「-め」)・用言性の派生形「-がる」「-まる」などの形成の可否を基準にして分類し、意味分野と対照した。たとえば「-がる」は<3.3 精神・行為>、「-さ、-め」は空間・時間の形容詞と結びつく。

文法では、このほか、自動詞と他動詞の問題がある。

(55) 西尾 寅弥「自動詞と他動詞——対応するものとししないもの——」〈1982〉

は、自他対応の現象を意味分野を考慮して研究したものである。この対応がめだつてすくないのは、<2.3 精神および行為>の項目である。また、<2.5 自然現象>では、他動詞の語末に<S>をもつものがおおい。これは、この分野の動詞がまず自動詞として成立したことをしめしている。

(106) 早津 恵美子「有対他動詞と無対他動詞の違いについて——意味的な特徴を中心に——」〈1989〉

(107) 早津 恵美子「有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布」〈1989〉は、さらにこまかい項目にわけて考察し、「有対他動詞」は<対象の変化>・<移動>を表す動詞に、「無対他動詞」は<再帰的>・<所持>・<授受>・<打撃>・<感情>などの動詞におおく、<設置・除去>の類は、両方ともおおい、という。

分類がむずかしいので、便宜上ここにおくが、

(20) 浅見 徹「語彙の単位」〈1974〉

は、単語の認定の変化にともなって、語彙調査の結果がどう変動するかを万葉集についてみたもので、その一部として、意味分類との関係が考察の対象になっている。単位をちいさくして、語基にあたるものを1単位とすると、<4. その他>の類がふえるという。

5. 方言

(44) 都竹 通年雄「飛騨萩原方言の植物語い」〈1981〉

は、自分自身の方言語彙を体系的に記述するところみであり、植物の語彙について、項目を思い出すための資料の1つとして『分類語彙表』をつかっている。

(30) 吉田 則夫「身体部位の語彙における体系性と地域性について——土佐方言を資料として——」〈1977〉

(54) 吉田 則夫「四国方言の感情語・形容語——高知県橋原町四万川方言」〈1982〉

は、ともに四国方言の体系的記述の台帳としてつかっている。

6. 日本語史

(47) 武井 睦雄「親族語彙の歴史」〈1982〉

(48) 山口 仲美「感覚・感情語彙の歴史」〈1982〉

は、ともに研究対象とする特定意味分野の語彙を抽出する資料として『分類語彙表』を使用している。

(4) 宮島 達夫「現代語いの形成」〈1967〉

は、近代にふえた語彙が、どの意味分野におおいかをしらべたもの。漢語は<1.1 抽象的關係>と<1.3 人間活動>、外来語は<1.4 生産物および用具>に、それぞれおおかった。

(91) 国立国語研究所『雑誌用語の変遷』〈1987〉

『中央公論』(1906-1976)の用語の経年調査の報告。「語彙 5. 品詞分布の変化」では、体の類(名詞)が増加、相の類(形容詞・副詞)は減少の傾向にあ

ることを指摘。「語誌——意味分野ごとの記述」では、単語の使用度数の増減を「イギリス～英国」「女性～女子～婦人」「都市～都会～農村～いなか」など同義語・同類語のグループにわけて整理・対照するために利用した。

7. 教育・発達

(29) 根本 今朝男・浜本 純逸・森田 信義「日・米・ソ教科書語いの比較研究Ⅰ——入門期教科書における名詞——」〈1977〉

(33) 根本 今朝男「日・米・ソ教科書語いの比較研究Ⅱ——入門期教科書における形容詞・副詞——」〈1978〉

(37) 根本 今朝男・浜本 純逸・森田 信義「日・米・ソ教科書語いの比較研究Ⅲ——入門期教科書における動詞・その他——」〈1979〉
三国の提出語彙が、どういう傾向があるか、品詞ごとに分けて比較考察。名詞ではソビエトは〈1.4 生産および用具〉〈1.5 自然物および自然現象〉が豊富で、動詞では日本は〈抽象的關係〉に、米・ソは〈精神および行為〉におおい。形容詞・副詞では、日・米・ソとも、こそあど関係がおおく、また共通して「いい」が提出されていることがわかった。

(57) 根本 今朝男「日・米・ソ国語教科書の提出語彙について」〈1982〉
は、この結果をまとめたものである。

(109) 広島県呉市立昭和北小学校研究会「語彙の分析システムについて／語彙の分析システムの実用化について」〈1989〉
作文によってえられた児童の使用語彙に分類番号をつけて、変化をみている。体の類(名詞)がへって用の類(動詞)がふえた、などの結果がある。

(5) 大久保 愛『幼児言語の発達』〈1967〉

(60) 前田 富祺・前田 紀代子『幼児の語彙発達の研究』〈1983〉
は、ともに幼児が語彙を習得していく過程の研究で、それぞれ、各年令での単語をおぼえたか、という資料が意味分野ごとにあげられている。成人の語彙を『分類語彙表』で代表させると、幼児では、たとえば食物や動物に関する語がおおい。

(76) 真田 信治「理解語彙量の累増過程——ことばの習得をめぐる事例研究——」〈1985〉

は、小学校1年・5年の段階で、どの分野の語彙がどの程度習得されたかについての研究である。品詞ごとの習得先行順は、接続詞・感動詞類 > 動詞類、形容詞類 > 名詞類になり、名詞の下位区分では、生産物や自然物が先行する。さらに下位のカテゴリールについての結果もでている。

(81) 田中 瑩一「語彙発達と語彙指導——一児童の日記に見られる使用語彙を手がかりに——」〈1986〉

(83) 田中 瑩一「一児童の日記に見られる使用語彙の発達——「抽象的關係」の意味分野の語彙について——」〈1986〉

は、1年から5年までの作文、つまり使用語彙について(前者は、とくに<1.3人間活動—精神および行為—>に属する語彙を中心に)、資料を提出している。

なお、作品の用語の項にあげた、物語文や作文に関する井上一郎氏の調査を参照。

8. 言語情報処理

言語情報処理関係の参考文献として『分類語彙表』があがっていることはおおいが、具体的に、どのように利用したかを明記してあるものもある。

(45) 荻野 綱男・荻野 孝野・淵 一博・田中 穂積・横山 晶一「分類語彙表による国語辞書ファイルの意味コード付け」〈1981〉

には、国語辞書ファイルの見出し語に、自動的に意味コードをつけた経験がのべられている。『分類語彙表』にある単語のうち、機械的なマッチングで利用できなかったものが19%あった。「これら」「どれどれ」のように辞書に見出し語がない、「奇蹟～奇跡」のように表記がちがう、などの理由による。

(86) 柴田 武『『分類語彙表』と『新明解国語辞典』のマッチング・リスト』〈1986〉

は、この結果マッチングしなかったものを分類番号順にならべたものである。

(28) 木村 健・遠藤 安彦・小橋 史彦「日本語文入力用カナ漢字変換システムの試作」〈1976〉

では、単語辞書ファイルに『分類語彙表』から古語的単語を除いた約 28,000 語を収めた。名詞を主体とした意味解析の高度化や、語彙の選定など辞書の最適化が図れた。

(49) 稲永 紘之・吉田 将「日本語処理のための機械辞書」〈1982〉
は、重要語を示すのに参考にした。

(118) 佐藤 理史「MBT 1: 実例に基づく訳語選択」〈1991〉
は、機械翻訳システムの改良のため、訳語間の距離を測定するのにつかっている。つまり、分類番号や段落番号を前から比較して行って、どこまで一致するかによって、単語間の類似度と距離を定義している。

(93) 荻野 孝野「日本語の意味分類体系」〈1987〉

(94) 田中 穂積・仁科 喜久子「上位／下位関係シソーラス ISAMAP 1 の作成(1)(2)」〈1987〉

など、あたらしいシソーラスを作成する過程においては、当然『分類語彙表』が利用されている。

9. 類語群

以上は、『分類語彙表』の分類体系を言語の分析に応用した例であるが、このほか、分析にはつかわないでも、言語の研究のために、ある意味範囲の語をぬきだす必要があり、その際に利用した、というケースもある。これは、一般の類語辞典・表現辞典としての使用法とおなじで、たまたま使用目的が研究にある、ということである。

(111) 細川 英雄「現代日本語の形容詞分類について」〈1989〉

は、形容詞の全体像をとらえるために、調査対象となる語彙を 6 種の文献中 2 種以上に共通のものとしたが、その 1 つに『分類語彙表』がある。

(97) 細川 英雄「現代日本語形容詞語彙一覧稿」〈1988〉

は各文献での語の採録・使用の有無を調査したものである。

(105) 吉田 則夫『『分類語彙表』の中の身体語を含む語彙一覧』〈1989〉
身体語を含む語彙が、どの意味領域にどのくらい分布しているかを一覧表として提示するために使用。(広義の身体語彙が、さまざまな意味領域に関わっていることを具体的に示すことができ、分野語彙を有機的に連関的に記述する方法につながる。)

(73) 秋元 美晴「『程度名詞』設定に関する試論」〈1985〉
〈相の類〉のうち、抽象関係及び自然現象の中から反義関係にある形容詞を抽出し、「どのくらい」という疑問副詞がつくか否かによって、どういう現象が認められるかを調べた。

(52) 小矢野 哲夫「副詞の意味記述について —— 方法と実際 ——」
〈1982〉
ある意味分野で小さい語彙体系をなす〈相の類〉から、記述の対象とする語彙を選定。(〈3.3000 意識・感覚〉の範囲から6語)

(32) 松井 栄一「近代口語文における程度副詞の消長 —— 程度の甚だしさを表わす場合 ——」〈1977〉

(102) 和泉 紀子「鷗外・漱石・芥川の文学語彙 —— 程度副詞すこぶる・大変などの場合 ——」〈1988〉
は、ともに、程度副詞のなかから調査項目をえらぶにあたって、『分類語彙表』の3.1993の項目を資料としている。後者の調査結果によると、鷗外は「すこぶる、だいぶ」、漱石は「だいぶ、大変」、芥川は「かなり、よほど」の語がおおい。

(7) 樺島 忠夫「『うそ』の語彙論」〈1968〉
「うそ」の関連語を分類・整理するために利用。語彙を論ずるには、内的条件としてシソーラス的なものが必要である。「うそ」の語彙を組織化すると、基本的な説明語となっているのは「だます」であった。

(72) 佐藤 茂「〈江〉をめぐるの語について」〈1985〉
現代日本語の中で〈江〉がどんなふうに使われているかみるために
1.525 川・湖>と<1.526 海・島>から引用。

(6) 佐久間 章「性状語連想反応の種類別出現頻度による言語材料の尺度化の試み」〈1967〉

反応としての性状語の尺度化の調査のため、刺激語の抽出台帳として使用。〈

1. 抽象的關係〉9語, 〈2. 人間活動の主体〉15語, 〈3. 人間活動—精神・行為—〉8語, 〈4. 生産物・用具〉72語, 〈5. 自然物・自然現象〉96語。

(8) 久米 稔「頻度をあらかず副詞の意味の測定」〈1969〉

は、アンケート方式で副詞の意味を測定したものである。調査対象の副詞を選定するために『分類語彙表』を利用。頻度の明確な意味をもつ副詞は「めったに、ときおり、つねに」など、不明確なものは「おうおうにして、さいさい、たびたび」などであった。

(98) 楠見 孝「共感覚的メタファの心理・語彙論的分析」〈1988〉

使用頻度の高い感覚形容語を収集するために利用。触覚・味覚の形容語で色・音や心的状態の名詞を修飾する、味覚・嗅覚の形容語と名詞は相互に修飾可能、などの結果を確認した。

(96) 楠見 孝「共感覚に基づく形容表現の理解過程について——感覚形容語の通様相的修飾——」〈1988〉

も同類の研究で、近感覚(触・味覚)→遠感覚(色・音)、感覚→心的状態(記憶・気分・考え・性格)のばあいには、理解可能性がたかいという。

(115) 竹内 晴彦「感性表現用語データベースの構築に向けて」〈1991〉

は、連想に基づく語彙関係をあきらかにするため、形容詞など277語をえらんで実験したもので、たとえば、「赤い」に対する類語としては「明るい」「熱い」など、反語としては「青い」「白い」など、対象としては「血」「炎」「りんご」などが上位にきている。

10. 意味分類

とくに分析に利用したわけではないが、一定範囲の語彙に『分類語彙表』の番号をつけた、というもの、つぎのようなものがある。

(27) 柏谷 嘉弘「天草本平家物語の漢語——分類語彙表——」〈1976〉

(34) 嘉藤 久美子「奈良平安時代和文脈系文学の基本語彙の分類に関する試み(一)」〈1978〉

などが古典についての例であり、前者は、新たに固有人名 1.239 と、固有動物名 1.5619 の 2 つの分類番号を設けている。

(46) 甲斐 睦朗『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』〈1982〉は、国語教科書の分析によって学習基本語彙を選定したものであるが、国語科専門用語および一般自立語を『分類語彙表』によって意味別に分類してのせている。

(68) 神戸大学教育学部語彙指導研究会『教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明』〈1985〉

(112) 浜本 純逸編『中学校語彙指導の活性化』〈1990〉

(113) 浜本 純逸編『小学校語彙指導の活性化』〈1990〉

も同様。

(63) 国立国語研究所『日本語教育のための基本語彙調査』[国立国語研究所報告 78] 〈1984〉

は、外国人のための基本語彙であるが、結果の分類だけでなく、選定の段階でも『分類語彙表』を利用している。

(110) 玉村 文郎「日本語の音象徴語の特徴とその教育」〈1989〉

は、これを利用して、音象徴語が日本語教育でとりあげられる度合いが国語教育のばあいよりもすくない、とのべている。

(59) 国立国語研究所『高校教科書の語彙調査』[国立国語研究所報告 76] 〈1983〉

(77) 国立国語研究所『中学校教科書の語彙調査』[国立国語研究所報告 87] 〈1986〉

には、調査でえられた全語彙(それぞれ、約 1 万 5 千と約 8 千)に、分類番号をつけており、新たに、固有人名 1.209 を設けた。

(104) 山崎 誠「意味別語彙表」〈1989〉

は、高校・中学校教科書の語彙を、『分類語彙表』の形式で整理したものであ

る。

(92) 情報処理振興事業協会技術センター『計算機用日本語基本動詞辞書』〈1987年3月〉

も、所収の各項目に『分類語彙表』の番号をつけている。

この報告は、1989・90年度科学研究費一般B「言語研究におけるシソーラスの利用法」(代表：宮島達夫)の成果報告の一部をなすものである。まだもれているものも多
いとおもわれるので、お気づきの方はご一報いただければさいわいである。

(年代順文献目録)

- 1) 石綿 敏雄「並立助詞「や」「と」の機能」[計量国語学 32] 〈1965年3月〉 23-30
- 2) 佐藤 茂「語彙分類の基本的問題」[福井大学学芸学部紀要 14] 〈1965年3月〉
61-72
- 3) 廣濱 文雄「複合してサ変動詞を作る漢字語の意味分類(2)」[山辺道 12] 〈1965年12月〉 62-69
- 4) 宮島 達夫「現代語いの形成」[国立国語研究所論集 3 ことばの研究 3] 〈1967年3月〉 1-16
- 5) 大久保 愛『幼児言語の発達』[東京堂出版] 〈1967年11月〉
- 6) 佐久間 章「性状語連想反応の種類別出現頻度による言語材料の尺度化の試み」
[テオリア 8] 〈1967年〉 1-39
- 7) 樺島 忠夫「「うそ」の語彙論」[言語生活] 〈1968年4月〉 44-50
- 8) 久米 稔「頻度をあらわす副詞の意味の測定」[早稲田大学語学教育研究所紀要 7]
〈1969年3月〉 117-139
- 9) 伊牟田 経久「源氏物語名詞語彙の構造」[佐伯梅友博士古稀記念国語学論集] 〈1969年6月〉 197-216
- 10) 小島 幸枝「キリシタンの基礎語彙——一つのモデル——」[計量国語学 49]
〈1969年6月〉 20-41
- 11) 伊牟田 経久「枕草子の名詞語彙の構造」[言語と文芸 70] 〈1970年5月〉 54-62
- 12) 中野 洋「言語情報処理における意味の把握についての一方策」[計量国語学 53] 〈1970年6月〉 16-25
- 13) 浅見 徹「古代の語彙」[講座国語史 3] 〈1971年9月〉 73-166
- 14) 石綿 敏雄「助詞「に」を含む動詞句の構造」[国立国語研究所報告 46 電子計算機による国語研究 4] 〈1972年3月〉 57-109
- 15) 今西 浩子「文中における分類語彙の相関——語彙体系化への一アプローチ——」

- [計量国語学 63] <1972年12月> 7-18
- 16) 石綿 敏雄「Méthode pour résoudre l'ambiguïté dans le traitement automatique du langage naturel」[Statistical Method in Linguistics vol 8 (Stockholm)] <1972年> 56-63
 - 17) 石綿 敏雄「人間の精神活動を意味する動詞の用法」[国立国語研究所報告 49 電子計算機による国語研究 5] <1973年3月> 185-235
 - 18) 浅見 徹「四季分類と語彙——万葉の巻ごとの特異語に関して——」[岐阜大学国文学 10] <1974年3月> 1-10
 - 19) 石綿 敏雄「動詞を中心とした語彙の分類」[国立国語研究所報告 51 電子計算機による国語研究 6] <1974年3月> 161-188
 - 20) 浅見 徹「語彙の単位」[岐阜大学教育学部研究報告 22] <1974年3月> 9-24
 - 21) 東辻 保和「接尾辞「がる」「ぶ・む」の対立——その意義論的考察——」[国文学攷 64] <1974年6月> 1-14
 - 22) 浅見 徹「巻八巻十の語彙——語彙論的な試み——」[堺田教授喜寿記念上代の文学と言語] <1974年11月> 235-272
 - 23) 玉村 文郎「語彙論から見た形容詞」[同志社国文学 10] <1975年2月> 1-18
 - 24) 石綿 敏雄「日本語の生成語彙論的記述と言語処理への応用」[国立国語研究所報告 54 電子計算機による国語研究 7] <1975年3月> 152-198
 - 25) 浅見 徹「巻十六の特異性——語彙構造の上から——」[吉永登先生古稀記念上代文学論集] <1975年9月> 166-177
 - 26) 玉村 文郎「現代形容語彙の構造——「分類語彙表」の「相の類」の分析——」[同志社国文学 11] <1976年2月> 1-14
 - 27) 柏谷 嘉弘「天草本平家物語の漢語——分類語彙表——」[大阪大医療技術短大部研究紀要 9] <1976年3月> 1-46
 - 28) 木村 健・遠藤 安彦・小橋 史彦「日本語文入力用カナ漢字変換システムの試作」[情報処理] <1976年11月> 1009-1016
 - 29) 根本 今朝男・浜本 純逸・森田 信義「日・米・ソ教科書語彙の比較研究 I ——入門期教科書における名詞——」[福岡教育大学紀要 26] <1977年2月> 121-158
 - 30) 吉田 則夫「身体部位の語彙における体系性と地域性について——土佐方言を資料として——」[高知大学研究学部研究報告 2-29] <1977年6月> 21-38
 - 31) 柏谷 嘉弘「天草本平家物語の漢語」[松村明教授還暦記念国語学と国語史] <1977年11月> 1204-1220
 - 32) 松井 栄一「近代口語文における程度副詞の消長——程度の基だしさを表わす場合——」[松村明教授還暦記念国語学と国語史] <1977年11月> 737-758
 - 33) 根本 今朝男「日・米・ソ教科書語彙の比較研究 II ——入門期教科書における形容詞・副詞——」[福岡教育大学紀要 27] <1978年2月> 97-116
 - 34) 嘉藤 久美子「奈良平安時代と文脈系文学の基本語彙の分類に関する試み(一)」[東海学園国語国文 13] <1978年3月> 159-183
 - 35) 浅見 徹「万葉集の語彙構造」[国語と国文学 55-5] <1978年5月> 1-30

- 36) 市井 外喜子「『竹むきが記』歌意索引による語彙の分析—二—」[日本文学研究(大東文化大)18] <1979年1月> 42-53
- 37) 根本 今朝男・浜本 純逸・森田 信義「日・米・ソ教科書語彙の比較研究III——入門期教科書における動詞・その他——」[福岡教育大学紀要 28] <1979年2月> 25-45
- 38) 玉村 文郎「日本語と中国語における音象徴語」[大谷女子大國文 9] <1979年3月> 208-216
- 39) 野村 雅昭・柳瀬 智子「児童読物の語彙構造」[計量国語学 12-2] <1979年9月> 86-95
- 40) 宮島 達夫「意味分野と語種」[国立国語研究所報告 65 研究報告集 2] <1980年3月> 1-16
- 41) 宮島 達夫「万葉と古今の用語の比較」[佐藤茂教授退官記念論集国語学] <1980年10月> 207-224
- 42) 村木 新次郎「日本語とドイツ語の「基本語彙」をくらべる」[計量国語学 12-8] <1981年3月> 356-366
- 43) 中野 洋「『分類語彙表』の語数」[計量国語学 12-8] <1981年3月> 376-381
- 44) 都竹 通年雄「飛騨萩原方言の植物語彙」[富山大学人文学部紀要 4] <1981年3月> 71-82
- 45) 荻野 綱男・荻野 孝野・淵 一博・田中 穂積・横山 晶一「分類語彙表による国語辞書ファイルの意味コード付け」[自然言語処理 24] <1981年9月> 1-8
- 46) 甲斐 睦朗『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』[光村図書] <1982年1月>
- 47) 武井 睦雄「親族語彙の歴史」[講座日本語学 4 巻語彙史] <1982年1月> 115-135
- 48) 山口 仲美「感覚・感情語彙の歴史」[講座日本語学 4 巻語彙史] <1982年1月> 202-227
- 49) 稲永 紘之・吉田 将「日本語処理のための機械辞書」[情報処理] <1982年2月> 140-146
- 50) 佐々木 靖章「白樺派文学の語彙」[講座日本語の語彙第 6 巻近代の語彙] <1982年2月> 297-323
- 51) 玉村 文郎「語彙および語の構造」[講座日本語学 12 巻外国語との対照III] <1982年3月> 2-22
- 52) 小矢野 哲夫「副詞の意味記述について——方法と実際——」[日本語・日本文化 11] <1982年3月> 39-63
- 53) 浅見 徹「人麻呂の用語——獻呈頌歌を材料に、語彙論的に」[美夫君志 26 号] <1982年3月> 86-97
- 54) 吉田 則夫「四国方言の感情語・形容語——高知県橋原町四万川方言」[講座日本語の語彙第 8 巻方言の語彙] <1982年4月> 279-298
- 55) 西尾 寅弥「自動詞と他動詞——対応するものとしらないもの——」[日本語教育 47] <1982年6月> 57-68
- 56) 林 二郎「基本語彙——その構造観」[講座日本語の語彙第 1 巻語彙原論] <1982年7月> 245-268
- 57) 根本今朝男「日・米・ソ国語教科書の提出語彙について」[言語生活] <1982年8月> 78-87

- 58) 中野 洋「流行歌の語彙」[講座日本語の語彙第7巻現代の語彙] <1982年11月>
257-307
- 59) 国立国語研究所『高校教科書の語彙調査』[国立国語研究所報告76] <1983年3月>
- 60) 前田 富祺・前田 紀代子『幼児の語彙発達の研究』[武蔵野書院] <1983年12月>
- 61) 相原 林司「形容詞分類の一試案——派生語形成の可否による——」[文藝言語研究
言語篇8] <1983年12月> 129-144
- 62) 井上 一郎・児童言語ゼミナール「作文の語彙」[文教国文学(広島文教女子大学国文学
会編)第14号] <1984年2月> 1-101
- 63) 国立国語研究所『日本語教育のための基本語彙調査』[国立国語研究所報告78] <1984
年3月>
- 64) 山内 洋一郎「連歌語彙の意味分類」[国語語彙史の研究5巻] <1984年5月> 189-
203
- 65) 井上 一郎・児童言語ゼミナール「作文の語彙2」[文教国文学(広島文教女子大学国文
学会編)第15号] <1984年9月> 1-12
- 66) 蔦原 伊都子「語の多義性について——動詞「かける」の意味分析——」[日本語学]
<1984年11月> 67-80
- 67) 井上 一郎「物語文の語彙——学習基本語彙の基礎的研究——」[文教国文学16]
<1985年1月> 17-42
- 68) 神戸大学教育学部語彙指導研究会『教育基本語彙の体系化とその指導方法の究明』[特
定研究研究報告書] <1985年3月>
- 69) 湯浅 茂雄『『工学字彙』の訳語とその造語要素の性格——明治期の学術用語の造語法
(1)——』[ノートルダム清心女子大学紀要国語国文学9-1] <1985年3月> 1-19
- 70) 玉村 文郎「形容語の世界」[日本語学4] <1985年3月> 4-12
- 71) 浅見 徹「四季分類・ふたつの間」[岐阜大学・国語国文学17号] <1985年3月> 66-78
- 72) 佐藤 茂「<江>をめぐっての語について」[日本海学会誌9] <1985年4月> 1-15
- 73) 秋元 美晴「『程度名詞』設定に関する試論」[甲子論集林巨樹先生華甲記念国語国文論
集] <1985年4月> 99-113
- 74) 安部 清哉「国語語彙論の方法について」[文芸研究(日本文芸研究会)110] <1985年9
月> 65-77
- 75) 大谷 伊都子「古典における動詞「かく」の用法——抽象事を表す語との結びつきか
ら——」[語文(大阪大学)46] <1985年12月> 1-13
- 76) 真田 信治「理解語彙量の累増過程——ことばの習得をめぐる事例研究——」[日本
語・日本文化研究論集(大阪大学)第3輯] <1985年12月> 65-112
- 77) 国立国語研究所『中学校教科書の語彙調査』[国立国語研究所報告87] <1986年3月>
- 78) 国立国語研究所『日独仏西基本語彙対照表』[国立国語研究所報告88] <1986年3月>
- 79) 前田 均「日中基本語彙比較」[山辺道30] <1986年3月> 109-117
- 80) 石井 正彦「複合名詞の語構造分析についての一考察——学術用語を例に——」[国
語学144] <1986年3月> 13-26
- 81) 田中 瑩一「語彙発達と語彙指導——一児童の日記に見られる使用語彙を手がかりに

- 」[国語科教育第33集]〈1986年3月〉19-26
- 82) 玉村 文郎「語形と語義の体系性——日本語とフランス語の動詞転成合成名詞の対照——」[日仏語の基本語彙の対照言語学的研究]〈1986年3月〉59-70
- 83) 田中 瑩一「一児童の日記に見られる使用語彙の発達——「抽象的關係」の意味分野の語彙について——」[表現学論考2]〈1986年4月〉183-188
- 84) 加藤 敏男「万葉集の直喩表現——語彙の面からの考察——」[言文33(福島大学)]〈1986年〉97-114
- 85) 大谷 伊都子「多義動詞の一考察——「だす」「あげる」「たてる」を例として——」[論集日本語研究(一)現代編]〈1986年11月〉361-375
- 86) 柴田 武『『分類語彙表』と『新明解国語辞典』のマッチング・リスト』[特定研究「言語情報処理の高度化のための基礎的研究」成果報告書]〈1986年12月〉
- 87) 浅見 徹「八代集における季節」[国語語彙史の研究7巻]〈1986年12月〉111-138
- 88) 東辻 保和「栄花物語語彙の一特性」[国語語彙史の研究7巻]〈1986年12月〉209-228
- 89) 稲垣 滋子「東京方言における話しことばの語彙分類」[語学研究(ICU)1-1]〈1986年〉2-18
- 90) 宮地 敦子「身体語研究の視界」[言語生活]〈1987年2月〉22-30
- 91) 国立国語研究所『雑誌用語の変遷』[国立国語研究所報告89]〈1987年3月〉
- 92) 情報処理振興事業協会技術センター『計算機用日本語基本動詞辞書』[情報処理振興事業協会技術センター]〈1987年3月〉
- 93) 荻野 孝野「日本語の意味分類体系」[計量国語学16-3]〈1987年9月〉70-80
- 94) 田中 穂積・仁科喜久子「上位/下位関係シソーラス ISAMAP 1 の作成(1)(2)」[自然言語処理64]〈1987年11月〉25-44
- 95) 山内 洋一郎「連歌語彙の意味構造の図式化——体の類について——」[国語語彙史の研究7巻]〈1987年12月〉253-270
- 96) 楠見 孝「共感覚に基づく形容表現の理解過程について——感覚形容語の通様相的修飾——」[心理学研究58-6]〈1988年2月〉373-380
- 97) 細川 英雄「現代日本語形容詞語彙一覧稿」[金沢大学教養部論集人文科学25-2]〈1988年3月〉193-220
- 98) 楠見 孝「共感覚的メタファの心理・語彙論的分析」[記号学研究8]〈1988年9月〉237-248
- 99) 能願 幸子「与謝野晶子短歌の語彙論的考察——『みだれ髪』から『火の鳥』へ——」[香川大学国文研究13]〈1988年9月〉54-67
- 100) 吉田 則夫「身体語彙の記述——語彙記述の方法論として——」[国語語彙史の研究9巻]〈1988年11月〉1-15
- 101) 犬飼 隆「平安末期複合動詞の意味構造——『分類語彙表』を利用する方法の試み——」[国語語彙史の研究9巻]〈1988年11月〉37-51
- 102) 和泉 紀子「鷗外・漱石・芥川の文学語彙——程度副詞すこぶる・大変などの場合——」[愛媛国文研究38]〈1988年12月〉48-59
- 103) 寺島 利尚「旅人歌の語彙・語法をめぐって——『遊於松浦河歌』とのかかわりにつ

- いて——」[文学論藻 63(東洋大学文学部紀要 42 国文学)] <1989 年 2 月> 100-125
- 104) 山崎 誠「意味別語彙表」[国立国語研究所報告 99 高校・中学校教科書の語彙調査分析編] <1989 年 3 月> 149-187
- 105) 吉田 則夫「『分類語彙表』の中の身体語を含む語彙一覧」[岡山大学教育学部研究集録 80] <1989 年 3 月> 1-20
- 106) 早津 恵美子「有対他動詞と無対他動詞の違いについて —— 意味的な特徴を中心に ——」[言語研究 95] <1989 年 3 月> 231-256
- 107) 早津 恵美子「有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布」[計量国語学 16-8] <1989 年 3 月> 353-364
- 108) 中野 洋「高校教科書の同音語」[国立国語研究所報告 99 高校・中学校教科書の語彙調査分析編] <1989 年 3 月> 77-131
- 109) 広島県呉市立昭和北小学校研究会「語彙の分析システムについて/語彙の分析システムの実用化について」[2,000 年への基礎学力] <1989 年 6 月> 67-81
- 110) 玉村 文郎「日本語の音象徴語の特徴とその教育」[日本語教育 68] <1989 年 7 月> 1-12
- 111) 細川 英雄「現代日本語の形容詞分類について」[国語学 158] <1989 年 9 月> 91-103
- 112) 浜本 純逸編『中学校語彙指導の活性化』[明治図書] <1990 年 2 月>
- 113) 浜本 純逸編『小学校語彙指導の活性化』[明治図書] <1990 年 2 月>
- 114) 小矢野 哲夫「シャッポはいずこへ」[フランス文化の中心と周縁 —— 1989 年特定研究報告書(大阪外国語大学フランス研究会)] <1990 年 3 月> 89-106
- 115) 竹内 晴彦「感性表現用語データベースの構築に向けて」[Human In-terface N&R 6-1] <1991 年 1 月> 51-58
- 116) 宮島 達夫・高木 翠「雑誌九十種資料の和語表記」[国立国語研究所報告 103 研究報告集 12] <1991 年 3 月> 1-82
- 117) 玉村 文郎「日本語における外来要素と外来語」[日本語教育 74] <1991 年 7 月> 13-27
- 118) 佐藤 理史「MBT 1: 実例に基づく訳語選択」[人工知能学会誌 6-4] <1991 年 7 月> 592-600
- 119) 田島 毓堂「栄華物語の語彙研究序説 —— 和歌の語彙について ——」[名古屋大学国語国文学 69] <1991 年 12 月> 102-114